

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：32631

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2012～2015

課題番号：24402046

研究課題名(和文) アジア諸国における教育の持続可能性とレジリエンスに関する総合的研究

研究課題名(英文) Synthetic Study on Sustainability and Resilience of Education in Asian Countries

研究代表者

永田 佳之 (Nagata, Yoshiyuki)

聖心女子大学・文学部・教授

研究者番号：20280513

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、アジア太平洋地域の災害大国とも言われるインドネシア、フィリピン、スリランカ、ニュージーランド、日本の5カ国における教育、特に学校教育の持続可能性とレジリエンスの特徴について質問紙調査及び現地及び日本国内でのインタビュー調査を通して明らかにした。特に研究のキーワードとして重視したレジリエンスについては「冗長性」、「多様性」、「頑強さ」、「自律性」を構成要素として捉え、分析を行った。国によっては、例えば、自律性が強い・弱いなどの特徴が見られ、学校や地域社会が持続可能になるための課題についても明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study focused on five countries in Asia and the Pacific. These are Indonesia, New Zealand, the Philippines, Sri Lanka and Japan. By making the most of questionnaire and interviews in Japan and overseas, the study identified some of the characteristics of sustainability and resilience of these countries. As regard with resilience, which was one of the key concept of the research design, five elements of redundancy, robustness, diversity and autonomy were emphasized and found that some countries were strong while others were weak in terms of autonomy and others. The research also found some of the issues and/or challenges for schools or communities to be more sustainable.

研究分野：持続可能な開発のための教育(ESD)

キーワード：レジリエンス 持続可能性 持続可能な開発 ESD 持続可能な開発のための教育 災害と教育

1. 研究開始当初の背景

東日本大震災後、校舎崩壊など、直視できない程の被害を目の当たりにしながらも、多くの教師は気丈に振る舞い、仕事に専念した。しかし、彼(女)らの中には無力感に襲われたり、無気力に苛まれたりする者は少なくなかった。また、元気そうであった子どもが不登校になったりするなど、被災後の学校や家庭でもレジリエンス(自己回復力/しなやかな強さ)が課題となっていた。こうした個人の持続可能性のみならず、学級や学校の運営も被災後は少なからぬ困難を抱えていた。また、国際的にも個人及び共同体としてのレジリエンスが注目を集めていた。

2. 研究の目的

システムが変化しても基本的な機能や構造を維持できる能力が今後の教育において重要となる。こうした考えのもとに、鍵概念としてレジリエンスを位置づけ、日本を含めた諸外国における教育のレジリエンスを育む要因や阻害する要因を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

研究対象の5カ国における被災地の学校や教会(日曜学校)等(インドネシア、スリランカ、ニュージーランド、フィリピン、日本)の教育施設の訪問(聴き取り)調査及びアンケート調査、ならびに文献調査を実施し、比較分析を行った。

分析の枠組みは次のとおりである。本質問紙調査の枠組みを検討するにあたり、「4つのR」、すなわち Robustness(頑強性:災害時・後に抵抗できる強さがあるか否か)、Redundancy(冗長性:災害時・後に代替的手段が確保されているか否か)、Resourcefulness(臨機応変性:災害を乗り越えるだけの資源が豊富にあるか否か)、Rapidly(迅速性:機能回復のための要件を

速やかに満たすことができるか否か)を参考に分析軸を決定した。

次に、教育現場において「4つのR」を構成する各要素がどのような意味合いをもつのかという読み替えを行った。

緊急時においては、管理職、場合によっては教育委員会や文部科学省の許可や指示を待つこと自体が被害を大きくすることもあり得ることを踏まえれば、一人ひとりの教師もしくは各校の自律的な判断によって対応することが期待される。このような意味において、重要なレジリエンスの要素としての「自律性」をもって「迅速性」は置き替えられた。また、「臨機応変性」は教育システムにおいては、日ごろから教師と児童・生徒との関係に加えて、地域の人々や教師間でコミュニケーションを取り、多様なネットワークを駆使できる状態にあることを示すため、「多様性」という表現に置き替えた。

調査の枠組みは下図のように表すことができる。この4つの要素のバランスおよび被災前後の変化を読み取ることで、レジリエンスを阻害する要因や促進する要因を探求することが可能であると考えた。

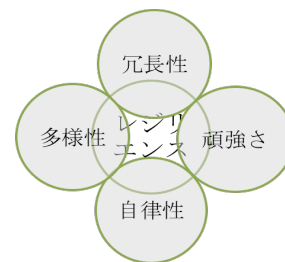


図 レジリエンスの構成要素

4. 研究成果

上記の研究対象5カ国におけるレジリエンスの特徴をそれぞれ明らかにした。

質問紙調査では、災害時に備える防災にとどまらず、学校の管理システムや教師間および対生徒との関係において日ごろから育まれている「学校文化」の特性を明らかにすることも射程に置いた。「学校文化」を

形成している特性は、教育現場のレジリエンスを高める要因と関係が深いと考えるため、被災前後における平時の教育活動、およびそれを支える学校システムに主眼を置いた。一部、災害時および被災直後における状況について回答を求める項目も含むが、質問紙全体を通して、被災前後の状況について尋ねている。

質問項目は大きく分けて2部からなる。教師個人の心理社会的レジリエンスと教育現場の機能回復との関係を見るため、「教師として」、「一個人として」という2つの立ち位置からの回答を求めている。一つ目の「教師として」の質問項目では、学校の管理体制、緊急時の対応、平時の相談相手、児童・生徒と教師、また教師間等の関係や教育活動にかかる学内外での連携体制等について聞いている。二つ目の「一個人として」では、資質や振る舞い、価値観について尋ねている。

レジリエンスを構成すると捉えた上記の4項目を点数化して各国ごとに平均をとり、示した。

例えば、インドネシアの場合、「自律性」と「冗長性」は比較的課題として挙げられるものの、全体的に学校のレジリエンスの度合いは高まっていることが分かった。

スリランカの場合は、被災前後を比べてみると、「多様性」と「頑強さ」に有意差を見ることができた一方で、「自律性」と「冗長性」に有意差は見られなかった。特に「自律性」は被災前よりも値が減っていることから、今後の課題として指摘されてよい。

日本の場合は「頑強さ」、「多様性」に被災前後で有意差を見ることができた。このことは組織として体系だった連絡網があることや会議の機会の増加、学校と地域社会との連携などからも顕著である。また「自律性」に有意差がでなかったことは、今後の課題として指摘され得るだろう。

ニュージーランドの場合は、被災前後を比べてみると、「冗長性」と「自律性」に有意差を見ることができた。後者については、教師が自身で判断して対応することが容認・奨励されていることが同国の特徴として挙げられる。「多様性」に有意差が表れなかったことは、地域との関わりを含めて、今後の課題として指摘されてよいだろう。

フィリピンの場合は、学校以外に家族や親族のつながりや関わりが強く、「多様性」に有意差を見ることができた。値の低かった「自律性」と「頑強さ」については、被災後に傷ついた教師らを支えた管理職の存在及び彼（女）らへの信頼の大きさが「自律性」の低さに表れたと読み取ることもできる。「頑強さ」の低さの方は、私立校所属の回答者が多かったことも反映して、政府や教育委員会との連携が弱いことが示唆されている。

これらの特徴の他、レジリエンスは信仰とも深く関わることが大半の調査地で明らかになった。イスラム教やキリスト教など、信仰が強い地域では信仰が多く被災者をレジリエントにしていた。一例であるが、アチェ（インドネシア）の公立小学校のある教師は「教師であることの責任感が自分をレジリエントにしていました」と回顧する一方で、「神様は人々を見捨てはしない、という信仰があったからこそ難局を乗り越えられました」と語っていた。こうした声は、神との垂直的関係性を指向することによって生まれるレジリエンスを表していると言えよう。

他方、水平的関係性とも呼べる指向性も多く語られていた。特にアジア諸国では、共同体の土着的とも呼べる絆が強固に残っており、災害時や被災後の困難な状況で功を奏したと言える。

なお、上記とは異なる水平的関係性として、常に他者との比較において自らの生き方や生き様を規定する傾向が少なくとも日本に

強く見られたことは強調されてよい。他者との比較を通して自己の存在を再確認する独自のレジリエンスが見出されたと言えよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

丸山英樹、津波災害後のスリランカにおける持続可能な地域社会の構築：ノンフォーマル教育研究の観点から、比較教育学研究 Vol. 52, 査読有、2016, 168-177.

[学会発表](計2件)

Yoshiyuki Nagata, Soga Sachiyo, 'An International Survey on Education and Resilience with Special Focus on Disaster-affected Areas in Asia and the Pacific.' The 8th World Environmental Education Congress. July 2, 2015, Gothenburg, Sweden.

永田佳之、中田有紀、曾我幸代「アジア太平洋地域5ヵ国における学校とレジリエンスに関する国際比較調査」日本比較教育学会第52回大会(大阪大学(大阪府)、2016年6月25日)。

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

<http://www.u-sacred-heart.ac.jp/nagata/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

永田佳之(Nagata, Yoshiyuki)

聖心女子大学・文学部・教授

研究者番号: 20280513

(2) 研究分担者

菊地栄治(Kikuchi, Eiji)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号: 10211872

丸山英樹(Maruyama, Hideki)

上智大学・グローバル教育センター・准教授

研究者番号: 10211872

市瀬智紀(Ichinose Tomoroni)

宮城教育大学・国際理解教育研究センター・教授

研究者番号: 30282148

吉田敦彦(Yoshida Atsuhiko)

大阪府立大学・人間社会学部・教授

研究者番号：20210677

山西優二 (Yamanishi Yuji)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：50210498

曽我幸代 (Soga Sachiyo)

名古屋市立大学・人間文化研究科・専任講師

研究者番号：40758041

横田和子 (Yokota Kazuko)

目白大学・人間学部児童教育学科・専任講師

研究者番号：80434249

(3)連携研究者

中田有紀 (Nakata Yuki)

東洋大学アジア文化研究所・客員研究員

研究者番号：30553771

(4)研究協力者

スベンドリニ・カクチ (Kakuchi, Suvendrini)

吉田直子 (Yoshida, Naoko)

辻本由比 (Tsujimoto, Yui)

南雲勇多 (Nagumo, Yuta)